

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

鎮座する塲をY字に避けていくこの人たちが暮らしてみたい

東京 井岸 純子

△評△ハトを追い立てないように歩く優しい人たち。「鎮座するも巧みで面白い。下の句は作者の願いがはつきり表れている。

生きていてくれればよいもう二度と私に会いに来なくていいよ

東京 水 面

△評△別れの言葉か。昔なら「もう会いたくない」の一言ですますところだろう。

忘れても消えるわけではない傷も私を私たらしめている

四万十市 佐竹 紫円

鈍重な雪雲のした植木屋は母国の音楽流しをつ剪る

武蔵野市 谷口 菜月

アンパイアがホームベースの土を払う玄關を掃くような軽さで

長岡市 三月 とあ

マルクスの隣に『株で稼ぐコツ』そんな本屋が私は好きだ

和歌山 中西 幸代

挨拶を褒め称えればA-Iが作ってくれたと頭掻く友

宮崎市 木許 裕夫

本年もよろしく願うも本心は死ぬまでよろしくお願ひします

神戸市 前田 達生

火の守りをずとして子 餅丸め時々ちぎって頬膨らみます子

宮崎市 上米良綾子

泥被り手柄は民へ譲る手に染む余裕が粋を語れり

東大阪市 志賀 克毅

米川千嘉子 選

がらんと胸に潮風吹き抜けて鳥居のごと旧防災対策庁舎

宮崎 門田 祥子

△評△東日本大震災の津波で多くの犠牲者が出た宮城県南三陸町の旧防災対策庁舎。震災遺構として残されたその姿。

パン屋でふと出しそうな図書カード出来たてふかふかの詩をください大野城市 野分のわ

野分のわ

△評△パンのおいしさ、匂い、食感。たしかにそれはとびきりの「詩」かも。

冊数を数へる読書家一冊に導かれ問ひつづけの読書

伊丹市 岡本 信子

歳の差を乗り越えたって語られてしまう二人が乗り越えたもの

長岡市 三月 とあ

育休と呼ぶことにした眠剤で病をあやし続ける日々を

四日市市 早川 和博

ふんはりとフリスビー纏ひてこの冬を羊になりて紙と遊ばん

京丹後市 山副美佐子

娘から誕生祝いの「ひよ子」くるボンボンと心おとる大寒

仙台市 石川 初子

絵手紙に庭の草木を描く暮らした上の劣化に目を向けぬまま

野田市 石原 典武

リハビリの母を見舞って母の居ぬ実家温め一人で飲んだ

駒ヶ根市 市山 利也

五十鈴川瀬音聞てくる茶屋の縁平和のありて孫らと座る

橿原市 中谷理英子

加藤 治郎 選

レシートにペンギンとありこの部屋はどこかにどうやらペンギンがいる春日井市 月夜の雨

春日井市 月夜の雨

△評△現実と虚構の間にある作品だ。レシートにペンギンは虚構かもしれない。ペンギンの存在を思うのはリアルな気持ちだ。

ただ風が強くてフードをかぶってるだけですが何もしてませんか 岸和田市 ツキミサキ

ツキミサキ

△評△フードをかぶることが疑われる。そういう恐れを抱く。冷たい世の中である。

高架下のふるびた一間のアパートに子は個包装みたいに暮らす

新宮市 小野小乃々

年老いた理容師に髭剃られつつ耳すませ聞く雪が降る音

東京 嶋村 純

電飾のアーチを抜けたその先に人の未来はあるのだろうか

北九州市 もりともみち

学校で魚やうさぎの目をみてることはなくてもころはあまるよ

平塚市 芝澤 樹

クレイフの甘くないほう差し出した なに喋っても泣いてしまふね 大津市 世田 夏雪

世田 夏雪

社食にてあなたの読んでる本の表紙を光が隠してしまう

四日市市 早川 和博

君を思うこともだんだんなくなって夜のあいだに消える台風

名古屋 森本 有

東京で まあ低くなる星の位置 駅前のかかりは扉のよう

東京 村田 湊

水原 紫苑 選

向かふ岸に届きあうてふ錯覚の霧の橋より人が零れる

甲府市 村田 一広

△評△橋といえは藤原定家の夢の浮橋の歌を思うが、これは夢ではない。人間の心の不思議がかけた橋である。

母なる眼、父なる頬の交差して獣のように雪ふりしきる

加古川市 石村 まい

△評△新たな個人の神話だろうか。顔に生きる母と父をけもの雪が打つ。

職場から見える山の名すべて識る生きる理由はひとに言わない

横浜 永永 キヌ

あけがたの葡萄を落る書きみづ折るたびみづ満ちるてのひら

東京 山野ゆかり

ふるさとの冬に付む白い駅 許せないけど忘れてあげる

大阪 中村 杏

粉雪の粉っぽさ失われゆく 汝自身を知れば知るほど

千葉市 星野 珠青

飲み会にドストエフスキーはいらないハイボールは窓を見ている

東京 結羽 成

風鈴の音が突然やってきて僕の形を忘れてしまふ

岡山市 松井 度

ざらざらのゼンマイ時計の真ん中を貫きました カササギの声

戸田市 水沢わさび

ロボットに足りないものはユーモアか不気味の谷を通り越すには

倉敷市 中路 修平

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。



こちらから投稿できます

おこわり 19日の俳壇「鳥渡る高層ビルは灯の墓標」は、類似の作品が過去にあるため入選を取り消します。

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生 (希望選者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム